



Title	松本書屋本『本草和名』について
Author(s)	武, 倩
Citation	研究論集, 15, 51(右)-60(右)
Issue Date	2016-01-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.15.r51
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60551
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_011_wu.pdf



松本書屋本『本草和名』について

武 倩

要 旨

『本草和名』は、九一八年頃に、深根輔仁によって著した薬物辞書である。本書は江戸幕府の医師多紀元簡によって紅葉山文庫で発見されるまで、長く所在不明であった。元簡は古写本を校訂し、版行したことによって世に広めた。

現在最も多く利用されているテキストは、『日本古典全集』所収の複製本（全集本）である。その底本となるのは、森立之父子が書き入れをした版本である。

武倩（二〇一三）『『本草和名』の諸本に関する一考察——万延元年影写本と全集本との関係を中心に——』（『訓点語と訓点資料』一三一）では、台北故宫博物院と無窮会専門図書館神習文庫所蔵の写本（万延元年影写本）を紹介しており、全集本との関係についても考察を行った。ただし、全集本底本の所在を突き止めることが出来なかった。

その後、森立之父子書入れ本が松本一男氏の所蔵に帰したことが分かり、『松本書屋貴書叢刊』にオールカラーで影印出版されていることも明らかになった。

本稿は、この『松本書屋貴書叢刊』所収のカラー版（松本書屋本）を用いて、これまでの書誌研究を見直したものである。

第二章では、蔵書印を手掛かりに、松本書屋本の所蔵経緯を整理する。第三章では、識語・書入れなどを分析し、小島本との密接な関係を述べる。第四章では、森立之によって行われた校訂をめぐって、詳しく考察する。

これらによって、本研究が今後の研究の手掛かりとなることを期待している。

一 はじめに

『本草和名』は、延喜年間（九一八年頃）に、深根輔仁が唐の『新修本草』に倣って著した薬物辞書である。本書が現代に伝わるまでの道のりは順調ではなく、江戸幕府の医師多紀元簡（一七五五～一八一〇）によって紅葉山文庫で発見されるまで、長く所在不明であった。元簡は紅葉山文庫古写本を校訂し、頭注を加え、序文と提要を付し、版行したことによって世に広めた。現在よく利用されるテキストに、『日本古典全集』所収の複製本（以下「全集本」）がある。その底本となるのは、大槻文彦旧蔵の、森立之父子が書き入れをした版本である。

武（二〇一三）では、『本草和名』の版本を概説した上で、台北故宫博物院や無窮会専門図書館神習文庫所蔵の写本（万延元年影写本）を紹介している。全集本と万延元年影写本との関係についても考察を行った。ただし、全集本底本の所在を突き止めることは出来ず、現在所在不明であると述べている。

その後、小曾戸洋先生から情報を頂き、森立之父子三色書入れ本が、一九八〇年代に東京古典会のオークションに出され、松本一男氏によって入札されたという。現在、『松本書屋貴書叢刊』にオールカラーで影印出版されていることも分かった。本稿は、この新しい資料（『松本書屋貴書叢刊』所収のカラー版、以下「松本書屋本」）を用いて、これまでの書誌研究を見直したものである。

二 松本書屋本の所蔵経緯

松本書屋本と全集本とを比較してみると、識語や書入れが一致しており、全集本が松本書屋本の前身であることに間違いない。ただ、所蔵者が増えることにつれて、冒頭と巻末に押されている蔵書印の数は、全集本より松本書屋本のほうが多い。松本書屋本に見られる蔵書印は次に示す通りである。

上巻序の初葉と下巻一才に、「大槻文庫」「文彦」「森氏」「松本蔵書」「宝玲文庫」

上巻末（六十ウ）と下巻「提要」の末に、「月明荘」「一馬」

「森氏」は、森立之（一八〇七～一八八五）と森約之（一八三七～一八七二）父子の蔵書印で、「大槻文庫」「文彦」は、大槻文彦（一八四七～一九二八）の蔵書印である。これらの蔵書印は全集本にもある。

一方、「一馬」「宝玲文庫」「月明荘」「松本蔵書」は、全集本では見られないもので、それぞれ川瀬一馬（一九〇六～一九九九）、フランク・ホーレー（一九〇六～一九六一）、反町茂雄氏（一九〇一～一九九二）、松本一男（一九四六～）の蔵書印である。

武（二〇一三）で紹介しているように、森父子三色書入れ本『本草和名』は、森約之の妻が大槻文彦の姉であるという繋がりで大槻文庫の蔵に帰した。大槻文庫に所蔵されている間、日本古典全集刊

行会によって、影印出版（一九二六年）され、そこから生まれたのは、全集本である。

ここまでの経緯は川瀬一馬の論著（川瀬、一九五五）で確認できるので、本書は大槻文庫を出た後に川瀬氏の手に入ったと考えられる。川瀬一馬と同時代の人物に、反町茂雄とフランク・ホーレーがある。

反町茂雄（一九〇一―一九九一）は、昭和時代の書誌学者、古書籍商。一九三二年に店舗を持たない稀覯本専門の古書店「弘文荘」を設立した。「月明荘」は、反町茂雄が稀書善本であることを認めた書物にのみ押印されたという。

フランク・ホーレーについては、横山（二〇〇三）が詳しい。それによると、フランク・ホーレー（一九〇六―一九六一）は、イギリス人言語学者、古書蒐集家、コレクションの「宝玲文庫」が質量ともに優れている。一九三一年にホーレーは語学教師として来日し、日本語に堪能で、書誌学にも通じ古書を収集した。一九四一年、第二次世界大戦の開戦により英国に送還され、蔵書は日本政府に接収された。戦後、ホーレーはザ・タイムズ紙の特派員として、再びの来日を果たし、接収された書物の奪還に取り組んだ。辞職後、（一九五二年に）東京から京都山科に移り、歿するまでそこに住した。

「外国人の日本書蒐集家としては、空前の大家である」と反町茂雄はホーレーを称賛しており、古典籍の蒐集という共通点から生まれた二人の付き合いは、戦前から始まった。ホーレーは京都に移住した後、経済的な理由で、蔵書を手放すようになった時期に、反町茂

雄が頻繁に山科のホーレー邸を訪ねるようになったという。森父子三色書入れ本『本草和名』もこの時期に、反町茂雄に売却された可能性が高い。

『弘文荘待買古書目総索引』を調べると、「本草和名 丹波元簡校寛政八年刊 森立之書入写 二冊」が、昭和三五年（一九六〇年）の『弘文荘待買古書目』（第三五号）に載せられていることが分かった。

上記のことから、本書の所蔵経緯をおおまかにまとめると次のようになる。

森父子↓大槻文彦↓川瀬一馬↓フランク・ホーレー↓反町茂雄↓
松本一男

三 小島本（国会八三〇一七）との関係

第二章で、蔵書印を手掛かりに松本書屋本の所蔵経緯をみてきた。森父子、大槻文彦、川瀬一馬に加えて、反町茂雄、フランク・ホーレーも本書を所蔵していたことが分かった。本章は、識語・書入れ・校正符号を手掛に、本書と小島本との関係をみていきたい。

ここという小島本は、小島尚質・小島尚真父子旧蔵の『本草和名』版本で、現在国立国会図書館に収められている（請求番号八三〇一七）。その電子画像は「国立国会図書館デジタル化資料」のホームページで公開されている。

小島尚質（一七九七～一八四九）、号宝素、江戸時代後期の医師、医学書の伝写と校訂に努めた。小島尚真（一八二九～一八五七）はその息子である。小島父子は、諸書を用いて本書に多くの校注を施した。その校注が森父子三色書入れ本へ転写されていることは、川瀬（一九五五）、杉本（二〇一一）で既に紹介されている。ここで強調したいのは、森父子の書入れを分析する際に、小島本にある小島父子の書入れと照合して考える必要があるということである。

なお、小島本に小島父子の蔵書印（「小島氏図書記」「尚真校読」のほかに、小杉楳邨（一八三五～一九一〇）の蔵書印（「温故堂文庫」「杉園藏」）も押されており、彼による赭筆の書入れも若干みられる（次のとおり）。

上八ウ4、上十六オ4、上二三オ3、上二五ウ8、上四二オ4、
上四六ウ8、上四七ウ1、上四九オ7、上五二ウ8、上五四オ6、
上五八オ5、下十七ウ8、下二二ウ5、下三十オ7、下三四オ3、
下三六ウ5、下六一ウ5

医学者の森父子や小島父子とは関心が異なるためか、国学者である小杉楳邨の書入れは、万葉仮名和訓のところに集中している。

三・一 識語からみた両本の関係

松本書屋本と小島本の関係や校注転写の経緯を把握するには、巻末にある識語を参照することが非常に有意義である。論述の便宜の

ために、松本書屋本の識語をここに提示する。下線の引いている部分は、小島本からの転写である。

① 上巻本文末（六十オ）

a（小島宝素、朱筆）

天保四年八月据狩谷掖齋伊呂波字類抄本校本審訂併及掖老校語
質記 上卷癸巳二月廿九日西城直舎校

b（森立之、朱筆）

安政乙卯三月廿四日以躋寿館原抄本比較竟 華佗巷人源立之

② 下巻本文末（五十五ウ・五十六オ）

a（森立之、朱筆）

安政二年四月初八日以躋寿館所蔵原鈔本比較竟此本影抄楓山御
庫舊抄本者福山森立之記

b（森約之）

（その一、墨筆）

安政元年十二月初七日以多紀本醫心方諸藥和名篇壹校過於藥名
大字而已夾注細字及和名未遑校之 約之

（その二、群青筆）

安政三丙辰二月廿六日以青藍標抹本經白字一名之旁以便檢閱耳
櫻庭約之

c（小島宝素）

（その一、朱筆）

天保四年九月三日据伊呂波字類抄參校本 西城直舎灯下朱校
往年余從屋代弘賢借字類抄与亡友山本恭庭同校未就恭庭已為泉
下人 今再照狩谷望之手校本率功併記狩谷氏校語以示子孫之嗣
是學者江戸小島質誌

(その二、朱筆)

天保十五年七月廿八日据香葉抄引一校併及香葉抄裏書時雨窓書
静質又誌

③ 下巻提要末(四ウ)(森約之、墨筆)

嘉永癸丑大呂廿三日晚書畢於馬米之晷知葉室南軒下其下巻初葉
到廿三葉家嚴所記即是源約之侵庭居士借寫寶素堂本也

まず、小島宝素の識語をみよう。上巻末の①aによると、宝素は
天保四年(一八三三)八月に、狩谷掖齋の「伊呂波字類抄參校本」
をもって審訂し、掖齋の校語を移写併記した。下巻末の②c(その
一)によると、天保四年九月三日に、「伊呂波字類抄參校本」をもつ
て、朱校を加えた。また、以前に屋代弘賢より「字類抄」を借り、
亡友の山本恭庭とともに校訂した。その後、再び掖齋の「手校本」
に照らして校訂を終え、掖齋の校語も併記した。②c(その二)に
よると、天保十五年(一八四四)七月二十八日に、「香葉抄引」によ
る校訂を行い、「香葉抄裏書」の記すところも併記した。

次に、森父子の識語をみよう。立之の識語①bと②aによると、
立之は躋寿館所蔵の「原鈔本」をもって、安政二年(一八五五)三

月二十四日に上巻を、安政二年四月初八日に下巻を校訂し終えた。

約之の識語②b(その一)、②b(その二)、③は、前述の宝素と
立之のものと異なり、筆の色が朱色ではなく墨色や群青色で書かれ
ている。墨筆の②b(その一)によると、約之は安政元年(一八五
四)十二月初七日に、多紀本医心方の諸葉和名篇をもって、葉名大
字及び夾注細字のところを校訂し終えたが、和名のところはまだし
ていない。群青筆の②b(その二)によると、約之は安政三年(一
八五六)二月二十六日に、検閲の便宜を図るために、青藍の筆で本
草経の白字一名に相当する部分に線を引いた。墨筆の下巻提要末③
は、嘉永六年(一八五三)十二月(陰曆)二十三日に書いたもので、
それによると、下巻初葉から二十三葉までの、家嚴(立之)の記す
ところは、約之が宝素堂から借りた本によるものである。

ここまで、松本書屋本にある識語を見てきた。下線部は森父子が
転写してきた部分で、すなわち、元々小島本にあったものである。
小島本には、上記の下線部以外に、次の一条もみられる。

④ 下巻本文末(五十六才)(小島尚真、朱筆)

此書寛政校刻之際間有誤脱文字曾欲依醫學原鈔訂正以事務倥傯
不果頃之友人森立之就原鈔校訂尤詳乃假立之校本校勘一過更以
原鈔本再審卒業聊記其由安政乙卯夏五初二日尚真識

この識語は、安政二年(一八五五)五月二日に、小島尚真によつ
て書き記されたものである。それによると、本書は寛政校刻の際に

たまたま誤脱文字が生じ、尚真は医学館の原鈔本による訂正を行いたかったが、仕事が忙しかったため、出来なかった。その頃、友人の森立之が原鈔本をもって詳しく校訂したのを知り、立之の校本を借りて校勘を行った。さらに、原鈔本による再審も行った^{注二}。

③と④を合わせてみると、校訂本の貸し出しは一方的ではない。嘉永年間に森約之は小島の校訂本を借り、父の立之と移写を進めた。その後、安政年間に小島尚真は原鈔本による校訂に当たり、森立之から校訂本を借りていた。

三・二 書入れ・校正符号からみた両本の関係

三・一で、識語の解説によつて、森父子が書入れをした松本書屋本と小島父子が書入れをした小島本との貸し出しや移写の経緯を整理してきた。前者には後者からの移写が多く存在することや、後者にある原鈔本による校訂は前者を参考に行っていることが明らかになった。次に、両本にある書入れと校正符号を比較することによつて、移写はどのような形式で進められたかをみてみる。

1 移写された校注と小島本にある元の校注との比較

小島本にある校注の多くは、森父子によつて忠実に再現されているが、中には形を変えて取り入れられたものもある。例えば、上五才6^{注三}「禹餘糧」條

禹餘糧【陶景注云禹昔行山乏食採此充糧而弃其餘故以名之】一

名白餘……

のところで、小島本では匡郭の上に「證類禹昔倒」、上欄に「證類白餘下有粮字千金翼方同此脱」という書入れがなされている。それは本文にある「禹昔」と「白餘」に対する校注である。意味するところは、證類本草において、「禹」と「昔」の順序が逆となっている。證類本草と千金翼方においては、「白餘」の下に「粮」という文字があるが、ここでは脱落している。

一方、松本書屋本では、匡郭の上や上欄に書入れがなされていないが、本文の「禹昔」のところに順序入れ替え記号「乙」を書き、横に「証倒」と記しており、「白餘」の下に補入記号「o」を書き、横に「粮【証翼 此書誤脱】」と注記している。

このように、小島本においては、校注を当該箇所の上部余白に書いているのに対して、松本書屋本では、それを本文中に盛り込んでいる傾向がみられた。

2 両本にある原鈔本による校訂の比較

前述のように、原鈔本による校訂に当たって、先に行われた森立之の校訂と、それを参考に行われた小島尚真の校訂がある。両者を比較すると、修正符号の使用や用字の校正に相違が見つかった。

修正符号に関しては、森立之は原鈔本で「空缺事例」となっている部分に「(」を付けている^{注三}のに対して、小島本では見せ消ち符号の「O」^{注四}を用いている。例えば、上八ウ9「方解石」條(左掲)

にある「石」と「唐」。

方解石【仁譜音佳買反】一名黃石【本條】一名黃味石【出雜要訣】一名夕石【出釈藥】唐

用字の校正に関しては、両本に一致が多くみられる一方、次のような不一致もみられる。

ア 小島本に校正あり、松本書屋に校正なし。

例えば、上五才6「禹餘糧」條（左掲）において、小島本では「採」の右側に「操」と書き、校正がなされているのに対して、松本書屋ではなされていない。

禹餘糧【陶景注云禹昔行山之食採此充糧而弃其餘故以名之】……

イ 松本書屋本に修正あり、小島本に修正なし。

例えば、上九才4「代赭」條（左掲）において、松本書屋本では「志」の右側に「土心」と書き、校正がなされているが、小島本ではなされていない。

代赭【陶景注云出代郡故以名之】……一名志一名土黄一名赤土……

武 松本書屋本『本草和名』について

四 森立之によって行われた原鈔本による校訂をめぐって

冒頭で紹介したように、森父子旧蔵の『本草和名』に書入れが多いのが特徴的で、以前から注目してきた。これまでにテキストとして用いられたモノクロ写真版の全集本は、判読しにくく、色合いが分からないなどの弱点がある。カラー版の松本書屋本の入手によって、書入れや校正符号に関する研究に新たな可能性が生まれてきた。本章の考察は、森立之によって行われた原鈔本による校訂をめぐって、以前の考察（武、二〇一三）を見直したものである。

四・一 「原鈔本」と万延元年影写本

ここでいう「原鈔本」は、三・一でみてきた森立之の識語①bと②a、及び小島尚真の識語④に現れたもので、江戸幕府の医学塾「躰寿館」旧蔵の、紅葉山文庫古写本の影写本を指している。森立之も小島尚真もこの影写本を用いて、版本を校訂したことは前述の通りである。

武（二〇一三）では、「万延元年影写本」（台北博物館蔵本と無窮会蔵本がある）を紹介しており、森立之のいう「原鈔本」は「万延元年影写本」を指していると述べている。

しかし、森立之の識語①bと②aが書かれたのは、万延元年（一八六〇）よりも前の安政二年（一八五五）であるため、その結論が成り立たない。ここで訂正させていただきたい。「万延元年影写本」

は「原鈔本」そのものではなく、両者は兄弟本あるいは親子本の関係にあると考えられる。

四・二 二種の「□」

武(二〇一三)では、森立之の用いた校正符号の「□」「(」について論証を行い、

「□」は「空缺字例」を表し、つまり「□」で囲んでいる文字が原鈔本では空白となっている。

「(」は「不載字例」を表し、つまり文字の左側に「(」が付いていれば、原鈔本ではその文字が欠けている。

という結論を得ている。今回はカラー版の松本書屋本を用いて、万延元年影写本(無窮会蔵本を使用)と照り合わせてみると、校正符号の「□」には墨と朱の二種類があることが分かった。

一 墨の「□」

多紀元簡が紅葉山古写本をもとに版本を作る際に設けたものと考えられる。墨の「□」で囲んでいる部分を万延元年影写本で確認すると、空白或いは脱字^(注五)になっている。例えば、

上五オ3「一名石^{【腦】}」、上十二オ1「或作^{【子】}」、上十六ウ2「一名^{【花使者】}」、上十六ウ7「仁^{【讀音□】}」、上二一ウ8「此蒲^{【□】}」

花上黄也」、上二二オ4「音^{【□】}者」、上二二ウ8「一名^{【□断】}」、上二三ウ3「仁^{【讀音渠□反】}」、上三七ウ7「和名^{【久礼乃於毛^(注六)】}」

などがある。「□」の中に文字が書かれているものもあれば、書かれていないものもある。前者の場合は、左掲のように、上欄に多紀元簡の校語がみられる。

上五オ3「一名石^{【腦】}」上欄：「按腦字原本缺今据証類校補」
上三七ウ7「和名^{【久礼乃於毛】}」上欄：「按原本脱久字今据醫心方及順抄校補」

2 朱の「□」

森立之が原鈔本をもつて版本を校訂する際に付けたものと考えられる。武(二〇一三)で紹介したように、「空缺字例」を表している。朱の「□」で囲んでいる部分は、万延元年影写本では空白となっている。例えば、

上六ウ8「一名羊起石^{【名】}五色扶渠」、上十一オ6「銅石^{【仁讀音古^{【猛反】}】}」、上十三ウ7「臭蒲^{【出香蒲條^{【蘇敬注】}】}」、上十五ウ7「麥^{【斛】}」^{【状似】}大麦出稽疑」

などがある。これらの例に、元簡によって設けられた墨の「□」が

見当たらないが、(左掲のように)一部においては、上欄に元簡の校語が記されている。

上十一才6「銅石【仁謂音古猛反】」上欄:「按猛字舊缺今據醫心方校補」

上十五ウ7「麥斛【状似大麦出稽疑】」上欄:「按麥斛状似四字原本缺今据証類校補」

四・三 版本における文字の欠落

原本に脱字と空字が多く存在することは前述のとおりである。今回の精査で、逆の場合、つまり原本にあった文字が版本になると脱落してしまったこともあると分かった。

脱落した文字は、森立之によつて朱筆で補入されている。例えば、松本書屋本の上十四才3「遠志」條

遠志 葉名小草……一名扶苑【已上四名出釋藥性】○一名晞苑

【出雜要訣】唐

においては、「【已上四名出釋藥性】」と「一名晞苑」の間に、補入記号「○」(朱筆)がみられ、その横に「唐」(朱筆)が書かれている。万延元年影写本で確認すると、元々「唐」の文字があつたことが分かる。また、松本書屋本の上十九ウ2「蒺藜子」條

蒺藜子 ……一名地行一名地莓【已上出藥對】和名波末比之

においては、「【已上】」と「出藥對」の間に「二名」(朱筆)が補入されている。万延元年影写本で確認すると、該当する部分は「【已上二名出藥對】」となっている。

版本で脱字が生じた原因について考えると、「遠志」條の場合は、産地を示す「唐」の文字が重複したため、前出の方が削除された可能性はある。それに対して、「蒺藜子」條の場合は、単なる間違いである可能性が高い。

五 まとめ

本稿は、書誌学の視点から、松本書屋本『本草和名』を紹介してきた。第二章では、蔵書印を手掛かりに、その所蔵経緯を整理した。第三章では、識語・書入れなどを分析し、小島本との密接な関係について述べた。第四章では、本テキストを利用し、以前の考察(武、二〇一三)を見直した。

松本書屋本『本草和名』は全集本に比べて、広く知られていないのが現状であり、本稿が今後の研究の手掛かりとなることを願っている。

(ぶ せい・言語文学専攻)

注

- 〔注一〕 識語の解説は、一部杉本（二〇一一）を参照にしている。
- 〔注二〕 「上五才6」は松本書屋本の上巻第五葉表第六行を表す。以下同じ。
- 〔注三〕 詳しくは四・二を参照。
- 〔注四〕 小島本で用いられる校正符号の「O」には、見せ消ちを表すものもあれば、そうでないものもある（例えば、上十四才8「一名澤足」の「足」）。
- 〔注五〕 後掲の例の中で、上三七ウ7「和名久礼乃於毛」のは脱字であり、それ以外は空白である。
- 〔注六〕 上五才3「一名石腦」、上二一ウ8「此蒲□□花上黄也」、上二二才4「音□□者」の「□」には墨色、朱色両方の筆跡がみられる。

参考文献

- 〔論著〕
- 川瀬一馬（一九五五）「第三章・第五節 本草和名」『古辭書の研究』大日本雄辯會講談社、七〇〜七六頁
- 小曾戸洋（一九九六）『中国医学古典と日本…書誌と伝承』塙書房
- 杉本つとむ（二〇一一）「余論…『本草和名』寸見」『日本本草学の世界…自然・医薬・民俗語彙の探究』八坂書房
- 反町茂雄（一九八六a）『一古書肆の思い出1 修業時代』平凡社
- 反町茂雄（一九八六b）『一古書肆の思い出2 賈（かいひと）を待つ者』平凡社
- 反町茂雄（一九八八）『一古書肆の思い出3 古典籍の奔流横溢』平凡社
- 反町茂雄（一九八九）『一古書肆の思い出4 激流に棹さして』平凡社
- 反町茂雄（一九九二）『一古書肆の思い出5 賑わいは夢の如く』平凡社

- 反町茂雄（一九九三a）『反町茂雄文集上 古典籍の世界』文書の会刊、八木書店発売
- 反町茂雄（一九九三b）『反町茂雄文集下 古書業界を語る』文書の会刊、八木書店発売
- 武倩（二〇一三）『『本草和名』の諸本に関する一考察——万延元年影写本と全集本との関係を中心に——』『訓点語と訓点資料』二二一、四三—五二頁
- 横山学（二〇〇三）『書物に魅せられた英国人 フランク・ホーレーと日本文化』吉川弘文館

- 〔複製本・目録など〕
- 『松本書屋貴重書叢刊』第1巻、松本一男編、谷口書店、一九九三
- 『弘文荘待賈古書目総索引』鈴木徳三編、八木書店、一九八八

〔電子化資料〕

- 『国立国会図書館デジタル化資料』国立国会図書館〈<http://dl.ndl.go.jp/>〉

付記

本研究は武田科学振興財団「杏雨書屋研究奨励」の支援のもとで実施されている。

情報収集の段階において、小曾戸洋先生（日本医史学会理事長）から貴重な教示を頂戴した。平素は、石塚晴通先生、池田証寿先生から御指導を頂いており、この場を借りて、心より感謝申し上げたい。